

第22回国連Weeks 植木安弘教授が成果を振り返る

10月7日から24日まで、「第22回上智大学国連Weeks」が開催された。「国連の活動を通じて、世界と私たちの未来について考えよう」というコンセプトのもと、11年目を迎えた今回も、平和構築、人道支援、気候変動など幅広いテーマでシンポジウムなどが企画された。在学生のほか、高校生や一般の方も含め、来場・オンライン合わせて参加者は約1,300人に達した。

国連の広報局や事務総長報道官室などの業務に約30年従事し、現在は国際協力人材育成センター所長として国連Weeksを牽引した植木安弘教授(グローバル・スタディーズ研究科)とともに今回のイベントを振り返る。

世界の分断化と多極化が進み国益重視傾向が強くなる中で、地球規模の課題にどう取り組んでいけば良いのか、グローバルな視点とローカルな視点から重層的に問題を考えました。

まず「ガザの新たな平和と復興」では、いまだ止まぬ戦争とその後の平和と復興について国連開発計画(UNDP)の事務次長補らとともに考えました。

他方、いまだに続くさまざまな地域や国での紛争下で起こる戦争犯罪や人権侵害について、国際刑事裁判所などの国際司法機関や国連人権高等弁務官事務所(OHCHR)などの役割とともに議論しました。

SDGsに関するシンポジウムでは、二酸化炭素排出削減やフードロスなどの問題について、持続的発展を維持するための最先端の研究紹介に加え、2050年のカーボンニュートラル社会実現に向けたローカルなレベルの取り組みを地方自治体や企業の代表の方々に説明していただきました。気候変動の深刻さについては、元国連事務次長のフランツ・バウマン博士の基調報告で明らかにしていただきました。

さらに、気候変動や戦争などで多くの課題に直面している世界遺産の現状と、その知的財産が持続可能な開発や環境保全の促進にどのように貢献できるかについて、ユネスコ世界遺産センターのホサガハル次長などとともに議論を深め、「世界遺産のモノログ」の展示も行われました。

国際協力・国際機関キャリアセッションでは、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の駐日代表の基調講演や国連訓練調査研究所(UNITAR)そして経済協力開発機構(OECD)による特別講演の後、本学国際協力人材育成センター(SHRIC)のアドバイザー・ネットワークの方々や外務省国際機関人事センターによる対面でのクロストークがあり、学生や一般の方に加え多くの高校生も参加し、活発な意見交換が行われました。

10月24日の国連デーには、アントニオ・グテーレス国連事務総長のメッセージを国連広報センターの根本かおる所長に紹介していただき、その後、人道支援におけるイノベーションの必要性を国連機関(UNHCR、UNICEF、WFP)の代表を交えてともに考えました。

ほとんどのセッションは対面とオンラインのハイフレックスで行われ、質疑応答も含め活発な議論が行われました。多くの大学生や社会人に加え、高校生の参加者も交えて、さまざまな問題をともに考える良い機会となりました。

公式ウェブサイトにてイベントレポート掲載中



植木安弘教授

大学対抗交渉コンペティションで快挙 国内外の強豪校を抑え 2位入賞

11月16日・17日の2日間にわたり上智大学が後援する第23回インターカレッジ・ネゴシエーション・コンペティションが開催され、本学チームが総合2位入賞を果たした。この大会は、日本語または英語で模擬仲裁・模擬交渉を行う大学対抗戦で、例年、上智大学四谷キャンパスで行われている。

大会には、日本の20大学とオーストラリア、韓国、シンガポールなど海外からの9大学、合計約300人が参加し、150人を超える国内外の実務家・研究者などからなる審査員団を前に、熱戦を繰り広げた。

本学からは、法学部国際取引法ゼミ19人のチームが参加し、総合成績で29チーム中2位という本学歴代最高の成績を収めた(優勝:チーム・オーストラリア、2位:上智大学、3位:シンガポール国立大学、4位:東京大学、5位:大阪大学)。また、日本語の交渉の部では1位、日本語の部の総合順位で東京大学に続いて2位、英語の部の総合順位でチーム・オーストラリア及びシンガポール国立大学に続いて3位(日本の大学でトップ)を獲得した。

上智大学チームに参加した深江夏蓮さん(法4)は、「この国際大会は、ゼミで学んだことを発揮できる集大成の場です。チームの仲間と同じ目標に向けて力を合わせ、大きな成果を収められとても嬉しく思っています。交渉



暁道学長(右端)への成果報告

や仲裁で最も大切なことは、自分の主張だけでなく、常に相手の立場に立って全体利益を考えること。そして、相手の出方を見て臨機応変に対応する難しさもありますが、チームで何度もシミュレーションし、幅広い視点や高い視座で物事を考えられるようになりました。この経験を、社会に出てから多様な立場の方と対話をするうえで役立てたいと思います」と話した。

指導教員の森下哲朗教授(法学部国際関係法学科)は、「1年前には人前で発表することさえ躊躇していた学生が、初めて会う海外の学生や審査員の前で堂々と意見を戦わせ、このような大きな成果を収めたことを誇りに思います。教員の知らないところで何度も議論を重ね、ときには仲間と言い合いになったり涙を流したりするなかで成長できたこと、そしてこのような大舞台で、チーム全員で力を合わせて楽しめたことは、学生にとって大きな人生の財産になると思います」と語り、大会を振り返った。

2025年度学費決定

2024年7月開催の理事会において、2025年度の学部・大学院の学費が決定しました。詳細は上智大学学内向けウェブサイトピロティに公開中ですので、ご確認ください。

▶ウェブピロティ

<https://piloti.sophia.ac.jp/jpn/tuition/>



ザビエルウィーク 世界クリスマス発見!

11月28日から12月2日にかけてザビエルウィークが開催された。本イベントは「上智大学の創立理念とカトリックアイデンティティを思い起こすこと」を目的とし、上智大学カトリック学生の会主催で毎年開催されている。

11月29日には、テーマ「世界クリスマス発見!」に基づいたパネルディスカッションが行われた。サリ・アガスティン理事長、神学部のホアン・アイダール教授や片山はるひ教授などが各国のクリスマスにまつわる文化や習慣について紹介した。

アガスティン理事長の育ったインドのケララ州、真夏にクリスマスをお祝いするアルゼンチン、カラフルな色合いのサントン人形が欠かせないフランス・プロヴァンス地方など、多種多様なクリスマスの祝い方が紹介された。

後半の質疑応答では、参加者から各国のクリスマスの料理や馬小屋制作の慣習についてなど、質問が活発に飛び交った。最後に登壇者へカトリック学生の会からお礼の品が手渡され、温かな雰囲気では終了した。



故郷のクリスマスを語るアガスティン理事長

上智大学コロンビアデー

食や文化を通じてコロンビアの魅力を感じ取る1日に

10月17日、上智大学で「コロンビアデー」が開催された。このイベントは、2023年10月に暁道佳明学長がコロンビア共和国の協定校である教皇立ハベリアナ大学を訪問した際、「コロンビアでの研究や留学に対する関心を高める機会を作ってほしい」と要望されたことを受けて企画された。

冒頭、来校したアンヘラ・ドゥラン同国臨時代理大使は、コロンビアデー

開催への謝意を示すとともに、このイベントがコロンビアの多様で豊かな文化を知ってもらう機会になることを願っていると述べた。続いて、駐日コロンビア大使館のパブロ・カルドナ三等書記官が登壇し、「コロンビアの魅力を発見する」というテーマで、同国の文化や歴史、驚異的な生物多様性について講演した。

その後は映画上映会が行われ、内戦



コロンビアの伝統的な料理やコーヒーが振る舞われた

に苦しみながらも平和のために戦う女性たちの姿を描いた作品や、ラテンアメリカで最初の自由都市サン・バシリオ・デ・パレンケの音楽家について描いた作品が上映された。

イベントの最後には、駐日コロンビア大使館の協力でコーヒーの試飲とスナックの試食が行われた。同国のコーヒー生産者連合によって選ばれたスペシャルティコーヒーが提供されたほか、エンパナーダやココアなどの伝統的な料理が振る舞われた。

学生たちが大使館職員に展示された写真をもとに各地域の違いや食文化について質問する姿も見られ、参加者は食を通じた文化交流を楽しんだ。



アンヘラ・ドゥラン駐日コロンビア臨時代理大使の挨拶



パブロ・カルドナ三等書記官のプレゼンテーション